花子まで

抄本ハ清少納言ノ手跡ニアラズ
カレドモ姓ヲ書シテ清少納言トイヘリ又ノ名ヲ元輔ノ
集ノ撰者紀貫之ノ人ノ
清原氏系圖
天武天皇――舎人親王（日本紀撰者）――貞代王――有雄――通雄――
海雄 統ノ
頭忠（キタノイ） 春光下野守 ――元輔（肥後守）――清少納言（此抄本ハ此ノ作ナリ）
雲居寺ノ住職ノ説ニ清少納言ハ一条院ノ皇后宮ノ女房ニシテ
此皇后宮ノ作ル小中納言（ナカ）ノ物語ヲ書写シ終リテ
其紙ノ末ニ清少納言ト書ケルヲ其ノ儘ニ書写シタル

三条院乃女院淑景舎（レイケイシャ）道隆（ミチタカ）の女（ムスメ）定子（サダコ）
乃（ノ）ましける比（ころ）愚草紙（おろかなるさうし）（ミツカヌ）といふ物を
人々乃（ノ）奏（ソウ）（久二）するを聞（キ）（カニカ）て作れる
二年（ふたとせ）ばかりの事ども也。一条院乃長徳（ちやうとく）年中（ねんぢう）長保（ちやうほ）元年
宮（みや）ゝ長保二年十二月十日（とをか）
三条院乃東宮（とうぐう）にて
ぞうや（カク）
里（さと）乃（ノ）
まうのぼり
あり

ざる物とのこそろそろ・双紙いかゝをかゝぐゝあるらん
ねゝやうぞ・ぶつまでも苦物そろそろをよし
山さゝしの文祥やうゝあきさゆゆゝ我宝のいつゝ
玉つゝ源氏物語ろゝ双し猪せゝれゝ源氏花苔紙とゝつゝみ
ゆるあや・吉田の兼好ゝしがはれゝ苔のゝも山苔の紙を廃
ぬせる不ゝ切ゝ・ゝ宝ゝあやゝ・詞の優美・心の幽玄文
山草紙更本さ句ゝ・或ハ二冊・或ハ三冊・或ハ一決し
ゝゝ・古今和歌集ハ撰集源氏物語ハ宮家ハ御筆あ
ゝゝ世ゝ定家ハ筆ハ花草ハ紙ゝしゝ山ハ陽筆を
又出ゝす・寛慶二年ハ玄尾列ゝ一本を得ゝ上下二冊
ゝゝ宰紙ゝゝゝ校中古ハ筆ありゝさゝゝゝ意あざ

やのゝゝゝゝゝ朱点をゝゝ且又人ゝハ借宮ハおど
ゝゝゝれゝゝ奥ゝ更宰ゝ面通ゝゝゝれ侍ゝ公本
為事を合せゝゝ用捨せゝれ侍ゝ・ゝ奥ゝ云ゝ
往年所持之愚本紛失季久更借出一両之本令書写
之依無證本不敢不審但管見之及勘合用記等註
付時代季月等謬歟

安貞　辛三月

老及愚翁在判

文明七未之仲夏廣橋亜槻送實相院准后本ノ下之本ノ末
両冊見示ヨリ余書写ヲ希也叡命ヲ辞止ヲ馳ス不亡ヲ彼
旧本不及切句此新写讀而欲ス容易故此ヲ捉之次ヲ朱
點畢

正二位行権大納言藤原朝臣教秀

山巻及愚考誰人ゟ申。勅撰ニ有之候ハ数奇ニ而
こそ従山奥出候ハゝ可被申本ニ候ハゝ
又一本上下二冊ニ而宮内ニ有之候ハゝ
ゟ一紙ニ写候ハゝよろしく候ハゝ
写ニ大きニ悪候ハゝ
つゝねずや山幸ゟ先を出候ハゝ
まで只山巻及奥書数首ニ而
古人ハ用ゟ被撰候ハゝ
續古今ニ葉集等ハ
皆山幸ゟ初而ニ
等小清水ニ紙ニ而
乃収同物ニ書加候ハゝ
ゟ被成候ハゝ

山草紙ニ申古今ニ書経ニ被用候ハゝ
足候ハゝ只今年山草紙ニ
会ニ
延喜式西宮ニ
ゟ被成候ハゝ
被成候ハゝ
ニ而
官位ニ
申ニハ順和名集ニ
山草紙ニ

用作り、我邦及異邦乃動物乃人に乃官考系圖
傳るに、云て補任・大系圖・帝紀
なぎまるに、り并八万葉集・古今六帖・三代實録
乃撰集家ゝれ集等ゝ動ゝ神社ゝ日本紀・三代實録
ト部乃家説等をうけ、ゝ傳乃うへいふ經ゝを動ゝ古語ゝ漢
家乃諸書よりんぐゝ古詩ゝ文選・文集の
文粹・朗詠集なで專よりくで我邦乃詩文乃ゝ
あり、ゝ山邊詩葉・数多乃名ねでゝ
葉ゝ、河海抄・花鳥餘情なで
物語乃諸抄を述ゝ、土左日記・大和
江談・古今序等よりくゞ
取紙乃後をすべきを見し詩ゝ

春ゝあけぼのゝやゝ白くなりゆく　曙
山ぎゝすこしあかりて紫だちたる雲乃ほそくたなびきたる
る事乃ゝ月のころよりはよるびきてあかりくるしく
おかしきをゝ秋ゝ夕ぐれ。夕日ゝさしてゝ山ぎゝいと
ちかくなりまさりて烏乃ねどころへゆくとて三つ四つ二つ
などゝびゆくさへあはれなり。まして雁などゝ
つらねたるがいとちいさくみゆるゝ。日入りはてゝ風の
音ゝ蟲乃ねなどゝ。冬ゝ雪乃ふりたるゝ
いとおかし。

春ゝあけぼのゝやゝ白くなりゆく　曙
山ぎゝすこしあかりて紫だちたる雲乃ほそくたなびきたる
る事乃ゝ月のころよりはよるびきてあかりくるしく
おかしきをゝ秋ゝ夕ぐれ。夕日ゝさしてゝ山ぎゝいと
ちかくなりまさりて烏乃ねどころへゆくとて三つ四つ二つ
などゝびゆくさへあはれなり。まして雁などゝ
つらねたるがいとちいさくみゆるゝ。日入りはてゝ風の
音ゝ蟲乃ねなどゝ。冬ゝ雪乃ふりたるゝ
いとおかし。

つくねふすま
めならぬあとなり 中宮うちなる
くえられぬし 其の事あの袖
をこふるとられぬ良
殿なりしも 殿のすかし
白うるへんとて 是おも
をも出てし 年中行事
斉会後二条大閤所行云正月
七日より此ちこゝち
ハる八陽のけて揃しまき
をまれたとしこれにのちて
正月七日をてるをとられハ
年中の邪気をさる年
災を除 とこの本文待
よや 是事元十節禄并
皇世記 記されれしきくは
延喜式 江次第に見ゆ 書
河海抄云 光仁天皇宝亀
六年正月七日天皇御楊梅
階安殿 設宴於五位已上
是而内厩 寮進青海馬
兵部省進五位已上装馬
是青馬の始也とく

かどろうしてわらふをとつるは人いれされぞ
立蔀
それとうしおとの又ゆらまとのそりぼうき女
友まどのゆきちがひするころおへしられいい
九重 禁中なり
ぞろある人々てのくをかくふちあるすゝん
あどおもひやあらうちてもんるいにせぞ
きれどわるゝこねわがかわれきぬもあられ
白粉之職 へ
きろきこゝのいゆきはりぬこゝろへをまくるる
ろうき庭す雪れむしぎてしゐるやうして
いとえぐるしぱるのおかりさりきこゆるもお
車の内へひきいり
ろろきてゝおかゆれぞぴきいりれてよくゝと
えやられを

待賢門を中の御門と号す
東の陽明門より白馬の陣へちうきゆくに此門より車をのりて入るゝまで
白馬の陣ハ建礼門をいふ 左る陣ハ春華門也 此次第二有 左る陣 右白馬陣
まで白馬のせちの本すより
かしらもひらくころまゆのひきひ まてる人る車に女房なりさひのりてゆる
門のきさき川いず ふすまて車ゆるきて皆ころひわひあるまゐ
さも狩もあらよろいかね八おれ 延喜弾正式云 凡内命婦二位以上聴用象牙櫛
梁塵愚案抄云 一条禅閤御説 刺櫛ハ女乃ひたひさしかざしの
左衛門の陣 建春門をいふ よりまつ府ハ宮城の諸門をまもる衛也 左中小西の諸
門ハ左衛門ちもり 宜秋門これ右衛門の陣也 東の諸門ハ左衛門もりて建春門は左衛
門の陣也 陣とハ左衛門の居る所をいふなり
殿上ノ 逍遥院殿説云四位五位六位までも昇殿を聴さる人を殿上人といふ
これらのてうりさうりかし 白馬の御せちのてうひの舎人也 一本とねりの
ごとしるしりる義をして上ハ近衛の陣ぞのまへにてありとうち見ゆるこ
とのよりつかさ 伊勢物語抄 つとめてとのもつかさにて 云言清少
どのもつかさとハ主殿寮をつかさどるなり 云々堂上せさる殿のちかくに女嬬と云女
を主殿の寮を役ともなし 殿上ノかよりつかれてお 後宮の職員
令曰 殿司 尚殿一人 掌供奉輿繖 膏沐 燈油火燭 薪炭之事 典殿二人掌同尚殿女嬬六人
女官 とのもんとハ名目抄云女云人の過ぎし殺人命婦などしもつかへ女官女也 禁秘抄云
女官 主殿女官 清紫宸殿 不可召人供御 但近日兼刀自 そのかりの湯
殿の女官などあり 江次第にも主殿女官 清涼殿 掌縫女官などいふてあし
あるにしとせりきりにて 禁中庭をとらへ 今あるかをひろげ行で金人のかりもよ
くえゆるく
とわりかなきぬも ありうね白き粉れ て車れ舎人の化粧のところなくなる程

八日人こよろこびいとなむ
八日小八女叙位の給女王禄
こととおうこそよろこい
ちうけ給りや。女叙位八女
乃位階を叙せ…
雲圖抄こう又しより給二女王禄
西宮抄江次第に給イ本ニ家ムのの是ぐらちうき女王ニ
日晴則所生之物育陰則災
十五日こちうめせくまる
餅粥節供進
延喜式圭水式云正月十五日
供御七種粥料中宮米一
斗五升粟黍子蓽古童
子胡麻子小豆各五升塩
四升ニ又中宮職式云
えう事文類聚六旧玉
燭宝典曰正月十五日作膏
粥汲初門戸ニ荊雚
家持記ニ委云々
かゆのまひきくし
すりうすをもちて膳を
うてばこをうしゃうひと
てくとこ豊よすると

十五日八日人こ
きかくちう
うけうちとうちとひ
をへしねこ
おかう

日ねし狭衣第四巻ニ
ふもれおうきくこと
こゆ粥ひきうてはく
こようぐひえうれと
よめいちうすりうすのくちうとゆ
るをゑ大将殿いえのひ光
をおこかうてうそぐぐ
れもまきうくんまさよ
ちうあるまうくいふと
わんこうくんどの
家乃ごぐち女まうちの
ほなまこれも女をまと
うちうちうくをこよく
宵君乃来門せうくちう
てうんとこうちうも
あるるのくおうもし
いうちうこおうんきうう
祝儀うそうとりれようろうも
服玄をいうこうんとも

うちくちひ
こ家れうおうちうぎ
津久そて日
くよりうこ
心えうくわ
れど。きこ
ぬまう
ちわうぎりこ
ふぷなうそ
きそうる。ぐよかう
しあうくぬうもおう。入うこ
うちうくなどをけんぐこれる
いうる心みうけんぷきそうぐちち

のかひらのへうちろう生事
をふさゝし
かしこまりて 畏の字也礼
更にかき定也禁中のうちの
あるしに武術の事乃かまり
折親て礼義も休みあるとも
除目乃事 縣召乃除目
也諸国等司ハ春除目也
日婚議之由見清涼記
折節ニ一條院ハ
月十二日よりおこなはる
見世ニ年中行事
召の除目とも云
をさねと経せ
女とハ諸国の司
あてやかの女の
召して任官
けやかに名づけ
任諸國ハ
國ハ雲圖
よしば
以極月
所掛し

つる人をのろひすがく立てふとおもし
禁中乃こと 内まゐりすぐやいごともあまりかへすべし
れてかしこまりし除目乃ひとまりすぐうち
わらいともおりし雷ふりこかりきりすと立つる
かのましかしとておきもし四位五位わかや
りこもちよげあるハいとゆうつしげなり
きもしつら志ろきこすがた人まいらくおんなの
ひの女房乃つおねりいかなどろのか身乃
かかきよりすど心をやりてときはなさる
をわりきさ人こハかすねを立わるべし
きも元よりもんよきにさしまへあつりましいとひ
えさるハりえど成ぬるこうけとおりたまれ

名替國替名國替。秩満更任。任府。返上
四位五位わかやまハ
式隨其望應其撰古今之例也
まうの身のしつらきよしを
ことわりなる。
三月三日 こくとのよ
杜子美詩 三月三日天氣新長安水邊多麗人
とし乃いもうとのこゝろもしる
朗詠云 桃 夜雨偸湿曽波之眼 新嬌暁風緩吹不言之口先咲 紀納言
事文類聚云 桃花生玉洞 柳葉暗金溝 梁庾肩吾
まうりこゝろうる
らくてかし。兼輔集
はさ衫子我生
花のかまさまる 後撰
名しつれおしたちきさ桜
花のかまきさせれどもろこび
よろりかえ
桜乃かおし 一條院従

四位ハ 職原抄云凡國司者相當五位已下也 然而雖四位已上
我身乃女おり
三月三日うつくとのゝかりけるとの
花乃いまださかりしも柳そいとおりしき
こうわれともちきまゆふこゝろ
われころおりしなれひろごろすハふてに花
をちきるのちハうしそさかゆる
柳乃やうしめぐるし
おもしろくちるさくらをあかくおりて
わかきあまさかり花がさしたまる
名れ桜乃かをしにいぞしちさ立く

楊直衣　面白　裏赤花
をゝ。直衣はつゆふかゝるし
こうりたるこそ白きもてら
のやをゆひ。或は平絹こ
表は平絹こ。濃き桃花
薬玉　いとうるはしき
桃花　葉葉云一枝指取出
袙有憚之時。暑之間衣
単衣着也。これ直衣のときぐ
うもゝのひらいつき
まうりのころ　賀茂の
祭の使の形乃事し。四月中の
酉乃日し勅使乃
張替八次第あり
次第小忌　延喜式大
政官式云凡賀茂二社
四月中酉祭　斎内親
向社。史一人。左右史生各
一人。官掌一人向祭所。撿
校諸事。山城国司預
録祭日申官。差勅使
舎人
まうもゝ
あれ。
白き
遠し

舎人幣并有走馬　裏
ひらこちのはせん　面白きふ
あをくそゝ心せんこゝろさし
一枝指花云青杉葉を
表青。裏青二藍ハ
うすひのもゝ
河海抄云絹襖也濃
野分出たるひきうすく
ゆふわらひきうすく
ゝもゝきつゝ
ひきつゝ
ゆふ紙ぬいたるを紙
つゝむし。おれ用をに
すゝご　未濃かゝを
白くそゝすゝを
結もこゝうゝも
けいしこれさ
けいし紙の裏もゝき
けいしをそゝきれいとを
背れおれし和名集云この

それのあをうとゝきをはもゝんぼごち
ごとくたまきを
かなせんまろ
まおあをみ
ひのもゝ
てそゆき
なりけれ
つゝひて
ぐちひて
そゝびう
けいし
ごとそゝ
こうぎそ
をゝ。あや

寿詞

濃下紫金銅金物之楯
をこ西宮記云楯御毛太上
皇以下四位以上通用云
これ昨今乃楯事なり
ほか納をとし安陸ともも
あうつるやうけなれい
事なり入て人もとこれ
ていとよくつくろひたん
にこうつくりて月差ふ
きやもこう作りて
のことなりとす
此楯をとしさる
に此楯をとしまつる
事一定此事ふるき
此楯を大進がうち
のかきりそく

りつ人ともすゐ里乃門ぬ
れられで里人これをつくる
ま千幼がくつ門をたゝく
にそのわれ民をおもふ
うち涙あれ我ま袴
波瀾ありて四馬の蓋
の車をいれんこうりつ
ようてそ手定國
蒙求も此事前漢書にて
そへし事なり
つもし進士ともこう
進士乃字ハ礼記乃王制ふ
出てり学問よく
す者をすぐり出て天子へ
あれ人及ず
燭料をのりて
を進士とりつゝ士と進
とてあ國へ
宮をつくるを
士とりつゝ
これる物ゆへ
ちとこ

こそなどうへ人を
家つ
ひらきまつぬ門やをあんず
んるどつ
ふれ
をおきそ
しくれ
すこのひろ
こゆるいとり
進士
んしるど
ぬりかきり
れんがくうへ
ぬりかくへき
まんそていい
おちつる
ざりつるこ
はぬねすも
こも土
病るおそれ
さいのみ
そうけ
家ぬ

も進士あり。源氏と公卿よ
父宮の兄進士よ成りてり
ひだのさいもりのひさかたて
東の宮のすゝめる乃障子に
あれてきのひさしみてそれ
まうさきその心を障子
に鶏金のあふりしるとも
それをうづねと 大進の家
あづまの枕障子れば鶏金
のめうしあね気をつくべ
きるかのよおおけるもれむ
それを名ねまてでし
家よ公りあしらうとて
中宮の御寮所の院乃お
それば御家内とおりすよ所
ろまでかやすぎりすること
かくるえでねそうておかると
かへえなれねのて来れる
とわざとふいてる犯
けそうに 顕證なりし
おくふくるとおありり
東久ときさきの
おさいおなしつねよ
別のはまあずれ御かはが
まいづき事ありて事とも

てんりおやまつわれぞこゝるものゝこゝろでは
さふりんまいりどとあまさこびのよこまつり
をどろきてみれば きちやうのうしろに
しるとうぶいのひかをけつすりぶさうじを
みすぶあけくりふすりくりぶとも障子
さらにかやうのすきくさまざごとありり
せめての家りおうしろしくてむげに
心りするらありとわりとこともなしわが
かさのある人をからしてかれなんめくれぬて
ねとのあやめるをとえばひきとをけてみ
やりてつうわしぶかれいそうけそうう
とりくおあずいくおまし つぶねおもしと

門のきをこうやしつれ
おりり手公る門の事を
いひきし門のせいりし
家をとうひつれは障子
あけるへはいへさりし
うこにまてんへいてよく
おぼきおうりんるへいふ
さひし首尾へ

あけねてあいふりてまお
清少おそるうへいやうく
そひつれりしこし
せうらこをするにおある
やくいされのいへん
せうちこい消息ところ
い案内すきし案内ひ
て君ひいんとするを誰久
君ひつれするやしといへんと
しを清少審に君ひつれ
りとおひてはすにおるす生
昌らねく志けるるとわ
らひさりそれていや狙し

よべこよの待るりとえぶ門の事をとうとも
津れさうじあけのくへとやいふぶおこちよこと
よ待んぞこまいつてんさいりまくとえぞ
いとえぞうまきこうけさうにえおえせじとてわ
らふあれのはのまき人こおりくりりてひさこ
ていねるのちまわりてとやうじ あけぬと
あつかさてまい川りねりしせうりこをする
まぱよのえありとえれのそいへんとげまおり
きんつとめてねまへよまうりてけいとれば
さるこうもきこえぶりつるをよべ乃こともま
めでていりふりそるあめりおそれあれ
をもてさあくらひそんいとむかれと

ほどめて流おまかりく
はいされハ　こちら頭注中
定れ作よんふて此段乃生昌乃生昌がみでまひを清少乃よとも
ひめみやの　これも頭注
生昌の事よりの別のもと
姫宮とハ一品女一宮一条
院皇女后母中宮定子のち
り脩子内親王とす
わらハのかざみかつひ
袖ハ童女乃汗衫乃下に
きる物られハかざみとお
こめれうそかうひき記
あるべし汗衫ハ童女の
うへにきる物也　今手乃
かざみやうなる物也
装束抄ありこまかり
かざみといへるは袖の上
とうひきて袋るとし
ちうせひ物きちうせひさ
つき　姫宮物さちうおりし
中せいハちいさきれ物てる土
器でおとよぶるをかざし
さそこうらんぞうひ

まりのせよあふ
ひめみや乃御れうれわらハのさうぞく（生昌が詞）
せさすべきよし物わせつるにまうすハ乃（中宮の仰付事也）
あこめれうそのうはおそひハいろいハほうま（条）
つるべきとやとまうすをまたさしおとりや（おかしとて笑ふ也）
姫宮乃おまへのものハれいのやうにてハ（そなと生昌が詞　清少乃申されしも）
にくげにうるわんちうせひ物きちう（ちいさきおれ物に）
やまたてうハうゑ物ひきてるわ（清少の詞）
せひきつきまをてうよくきりぬといめと（サうる土器也　疊子乃えひし）
まくもまゐりよりはあとらふをあそれハ乃（陰膳など供ふるもの也　中宮の仰せ）
人乃やうにかつおいひわひうへとさうそ（まさんかう）

さやうかちいさきお
きちふそうる彼童女
ぎりし陰膳供りよりあ
よのもとぞもちうせひお
あとこそるとおぎなりて
うへ物ちひきてるわうふ
こそ大進が詞をうまく
いてうるさうるさまい
るとハ供ふる心し深し
こくりしやうる記是是
るなどおる詞とあうし
ぶときこすくるうあんと
生昌ハ建国の正直なる翁
をそひさうりて其代のあた
まんかうかるハ勤考し
おめやうかるなで
大進物きこうんと仍りと
清少小物らんと生昌ハ
やまきん今のなひつでし
ひき衣のうすやいうんと
生昌乃思ひ仍し事を
託ひうんさまやとこへども
それも清少の心をうちの子
おかすはのうれしきるもと

あるものをいとおうげふとせいし（さやうの事ハあまりの事なりと制したのなり）
おい。ちうげんあるおりよ。大進まゐき（中間中の事につきさる...）
こえんとありと。人乃はぐるをきこしゆ（中宮ハこうろ事也）
てまおでうとひでわうりれんとうん
こおりせうあるもいとおかし。ゆきて（生昌の詞　中宮清少子の事也）
のたまへとれバまさと出されバひとなの
門乃ことを中納言まかうり待りけバいそう（生昌が兄惟仲中納言也　千広言門のこと）
うかんだんされてこそできるべうかん物りる
さいめんまうくやうげありんとおんやし（清少よりの対銃せんと惟仲のまうされしと）
されつるぞてまことそあり。ひとなの（別の用事とおもふ　清少の心）
こりやゆうんさゆときめきまうれぞ
いまさげりり清つかまうりんと（生昌が今ふやうれ　清少のなとふて困せんと）

いんとくし　緯の字
志(じ)ぞていぬれば　緯退(じ)の字しかしてあり
それらのひかりで見てくが
どいて生昌が飛りてるき
やつることをきゝ人を
生昌がひし惟仲の弟
しるをきゝやうにめん路
里とりせてと中宮へ清少
のりとるさ
そのつり志ろうり
どうもくも清少の居るう
物まねうんおもきそ
をかし清少にまるとを
ごと志てよびおそて
ほどのおのやうさ
その名ちるゝかし
生昌が賢き人へと　中宮紀
流石はきもいとおかし
うへにさふらふ御ねこは
そよおひ別のもしろう
と八六十六代一条院より

此帝猫を寵愛(ちょうあい)し給ふ　小右記云長保元年九月十九日内裏御猫産子女院左大臣右大臣有産養事　重椀飯　納筥之衣装等　猫乳母馬命婦　時人咲之　希奇(きき)怪事也
かうふりゆるりて　叙爵
せしく五位を叙せしことし
事と猫を寵愛(てうあい)し給ふおもむき
あらはし　衛懿公(ゑいいこう)鶴を愛(あい)し
て大夫の車にのせる
在給ふおもしろいや
命婦のおとど　彼叙爵時世
猫の名し女房の五位に叙
さるゝ命婦といふ也
駒の字がしつきて　ある類
源氏にも見ゆ　侍者と云
やす命婦の名をとく
あさられいのもあり　年中
行事云合臣云あさられ

緯退志てし
志ていぬれぞかつりまつりてるふさて　清少の中宮へまかりしこ　中宮
ごゝろとのありすればかし　侍る事をさらん
とまねびけい志てくわざとせてうし　又清少の戸ねと
よび出できこともおもねをどのづう
志げりつおねむどろりおもんもとく
りとそてわくぞ。その心がちりかし　中宮の清少
こおよ人乃かめてるをぞれじやよ
よそつけ志てるるあんとのぬえするは
そうきもいとおかし
清少の説にいふ
かくり生昌清少に勘当(かんだう)志て追従(ついしょう)する推量(すいりゃう)れ清気とあり
うへにさふらふ御ねこは　あそびて
命婦(みやうぶ)のおとどとていと名なかしつぜ
まかじに出(いで)するとあれと乃むまれ命
婦(ぶ)あるまきさるやいりま(へ)とよぶまきで
日乃さしはいりさるまうちねかりてね
まるをおどとどとてかきるまろいづく命
婦れおとど　くとみまぽまえとりやそていまきれ
その乳母とかうまされぬがあくびえまでして
みるとみちよいりぬあさがれいのまわり
うへいおそしますこらん志ていこうぞ
ろのせまふねこは清かこころまいれさせあひ
ておのこどもめせぞ　忠隆(ただたか)勘物あり
蔵人(くらうど)ただたかまつるさ
るりぱおきさまおうち　打調じ徴や
りはりのせて　つかさとおかせするれはあろ
猫のおしろいに　ねこをまつりなる御邪一季より出まいし
猫をかくしていしに大八鼬ぬ
犬の名　翁丸ナ
猫の乳母
威乃字
猫を犬のひしと流説
猶の名も大を手飼ひせしむるはもし

ところハ夭子乃邸の御厠乃
名代厠を供じる所まで行り
かれどもハかれぬる飯ども待りや
ここ朝餉間清涼殿乃南
りあくも狩猟を秘かりうまる
犬人之だり　勘物云源忠隆
長保二年正月廿七日犬人
陸奥守従四位下満忠男
あつかりてかりさつて
内裏の犬を狩るハ犬人
滝口にてあつかるところ
禁秘抄云、犬狩　犬人承
御下知所衆滝口参、滝口
帯弓箭、儲所々、射犬所
衆入縁下狩出　下略
まさぐらまとして　犬人
の下に待るもの　禁秘抄云
着布衣且暮候御遊所
勅使等公役随所作仕之
職原抄云、堪武勇之輩
可補之々、員廿人云々
みな　誰ともしらねど但
奥より飼成つるいうるを

まりてかりさえぐ。ぴまれ命婦もさいな
こそめのとのへてん。いとうしつつしと探
せうるれば。しこかわてはおみ。も出まど
いぬをかり出そうるきさぐちおどして老ひ
ほうり川。おのれいうじくゆるぎおりき
つるこの翁ぞ。三月三日ゑ次矢。柳のかげ
らふ作せずして　あるとうせあひし
をせるせ。とし乃花のぞしにさてせ。さそ
おりがつるめあんとハ知ちいかけるんや
とあわれげる。おそのくおりハ如何ちすむり
いきふくふもさらぐ　ちてここそあれたまず
ひとく。三四月まるりね。ひろつうる犬の

あまうう乃犬の　翁丸とへ
ちそての乃犬ぞとほか
あの君ぞへるめし
まろり乃犬とも　女乃
犬をかまじむとめし
そうもやうと　ひやしさき
そのしやうとの乃まなき
まうきつきさこゆる
やたよむつしま。御流
源氏するのをにあうる
や禁秘抄に御厠人とさ

幸の季
かうしちく
きりやうくるとしてき
いまるし

つとくあくころ乃すれバなふ乃ろ乃
犬乃かくひさしてまくふのおしんや
きくはよる川乃犬ども下きさつきふ
らひをりゆきこそやうとあるとのそ里
きそおないうじ犬を犬人二人ちくうら
おひちつぬへし。おがさせすひろるがかつり
かりさまもしててちまなさうふぷうら乃
ころや。おきるまるおりぱんでたうき。ふ
さあんう川といへばせつおやるりしにがる
うちてあきやえね。ちまえれバ門乃わうま
ひきすそ川と又バおそれがりあどする
夕つろぷぢげまそれあきこりげる

あはれまろの　是翁丸と申
を畧まてよひつみける頃
ひとすぢふりで翁丸うせ
りけるにし
ものいおもやそれ　彼翁丸
かみかかやさの犬ハその記を
ずるし

右近ゟ刀してまいる
おとふ右近門将とある日
人々とし。翁丸ハ牛五
留ゝ乃别の主にハ中宮
備子内親王を生給付
湯殿ハ内よりの加わや
本すし右近内侍まい
まいるとまり同主と親康
親王生れありて方よりもゆ
どのふハ右近内侍御の馬
こまりやせこともある人を
そし待り
又かきさるたとよんハ　日比ハよんハ
まいる翁丸ましく翁丸
ふハまいりとも右近ゟよすし

犬乃まびしけなるがわるがきこあなどけぞ
おそれまろがくるいねやそこれごとハ犬ゆる
まどのみり。おきさるやまろとよんどこふでゆ
いれとぞれぞとい〳〵。おもすとひ〳〵くらく
よせぞ。右近ゟ刀さしてよくやそへと
あるをぞすげくこ〳〵てめせハかまうり
〳〵あ。これハおきさるやまろと刀をせさせなふ
り似〳〵待れよもこれハゆ〳〵さげふ〳〵待る
めれ又おきさるやまろとよく〳〵よろこびてまび
くるよのをよんどよわこととおくねるなり
されそうちうろさてすて待りねくろや
あれ〳〵翁丸の二人さてもげんよ〳〵さんやとやせ

日比ハまつめさてもくハあら
まことに犬乃今ハをまれて
拙くもされだ翁丸ハ
あまりし法名せしく
法名ふりけり
揃様　流くをとるす
あり。中宮も法師を法か
乃なぐの待し隠ぞ御
翌年まりある頃し
流りここそとせて
法かりり流鏡をさりとせ
し中宮も法名とぞること
法乃弟小りの此さひを
此さひは河みりふるまん
つんとこし

心うりしせまふくうありて拙くぞせさ
れどくろそねだ。おくねよのまらひかすて
やとめるぞとめて法名ぐりく佐まり
流てうげまいりくゝれりでよをそせて佐
らんすれをさふかよ犬乃ならのを
ぞうりはいねさるを。おそれかのふおきさ
あまろをゆうりおしうな。さてまらん
こうかるうくれ。ほ乃弟りの此さひそ
ありねん。ハまわハ苦きこてちさらん
こうちりふかざりばねするいねつひ
わずきてあきこをさておとしなかと
いとあさまし。さそこれおきし子丸よ

二月一日 三月ニ
そらう別のくしぬ
元日上巳ノ二ツノ
ごとくいふ二説あり
さるをはぶきていふ

五月みのハつとうそく
黄梅の時雨うそ
小路をもしもれ

雨ふり
三体詩云菊為重陽
雨用事文類聚云重陽日陰雨妻ノ戯馬臺前泥
拍肚竜山會上水平脚

おりひさる
菊乃きせ綿し
云九日わくひで菊を
ほす人ぐで。其花をや古事
可勘世諺問答云一条ふ良云
陰汲菊ノ綿を
宮ぢをかぶんとよ
よろこびうする
そしわ別のさ
とて屋敷ごとの

ハつうと年中行事
弁合乃ごとくあり
うろをすてて
ちう。裾ハ下ノ裳乃
ふくとりて
延喜式四十二凡五位以上通用
以下官人用木前挿後方ノ各目釼云
ちうをひあつしく。釈名云勃然忽也君有教命及所啓則書其上備忘忘也

むひくくそそをいしおくしこつよ
ろこうやくにきこゆるつう。但諸家
てしすくし。日本紀神功皇后紀ノ引乃ごとくし。拾芥抄云拝置物立左右
居左右取笏ハ拝ス再拝ヲ云ハ乃百首ノ
てたまそやまうず人信礼
さつぐよ。
例乃ごとくそくる
いま内裏乃
裏一条院長保元年六
月十四日内裏焼三十六日
行幸女院御所也同二年
十月十日行幸新造内裏
これ初造ヲ
ホめらん
湖平門北面ニ於ス
勘物ニ今内
楠
あらん乃
ねうし又
推中将の
乃ごとくせそやとのひ

名ハつきくんとも
かつらの岡 来勘合
わが出しおもしろき
多賀にほれるく客を思ふ
えんこかろよれうる舟
よふかうれみち
あをいろの岡 来勘合
名人しるの多きつく
古伝記人者名この神さま心
もやまをこハ麹塵の袍
やそ天子乃ふ衣乃日乃ひを見人ハ
着襪 頭巾 下沓服之儀也晴時錐尾下萠着之
ふかち 綿冠 来勘

海も

ちうし 近江の湖乃
金吾乃うし 来勘仁施の
とうしふもあり

ちうしの陵 志賀須香
にぶこほうし
ちうしの陵 来勘
ハこ、陵乃ちもふそと

みさゝぎ 字書云帝王
所葬曰陵。帝礼伝墓
うつひとのうちうしき
延喜式北一諸陵寮小遠
陵近陵ともめく伝れどハ
名もそ、ハ。ハ事もきき
ふるそ、ハ。但仁徳天皇と百舌鳥野乃陵
かしこうしの 延喜式治部省式云 楯原陵 平安宮御宇桓武天皇在山城國紀伊郡
ありのうちうしき そも延喜式うしそ、ハ
乃山称の陵廟うや

近衛陣門 陽明門をそ
称ふうしそ、うしの。神武乃
ふ称ふこの乃れうしうしの
おふかうしの 来勘合
由来称ふ陽明門とも

二条一条もうし
二条院ハ二条の帝乃陵
天暦の母后乃れ称と称ふ
うしうし。一条院ハ一条れ
南大門乃東二町。謙徳公乃家又法性寺乃大臣
うめごみのくうや
そのくうしうしうや
せりあ 遠和院
うし。正親町の小野宮忠仁公の家と称ふ又源氏の称とも
正親町乃南京極乃西乃角乃れ土御門と称ふうし

いへハ
この名のしるべ
西京院門
せりあ
院
すがと
とうあ
とうし二条、

すぐりのかん於勘解由小路乃南。烏丸乃西一町。道真公乃住給ひ多議是善の家
や。當時萬壽寺殿と。申奉りしと。御歸洛の後。此邊火災よりて。神泉院とうつし
奉りしかん。本い冷然院なりしを火災よりて。神泉院とうつし。檢
り大炊御門乃南。堀川乃西。淨福寺乃北。淨土院乃東。佛性院乃北。
朱雀院。淳和院乃西。二條乃南。西洞院乃東。四條乃北。四町。四条の小朱雀院乃西四町。四条の小
とうおん。洞院とうや。
小野宮。大炊御門乃南。烏丸の西。惟高親王の家。定頼卿これを傳領す。淸慎公ここに住給ふ。
とうでいの。紅梅殿とう於。又条坊門の小町乃西。
あぢさいの。縣井戸於。一条の小。東洞院の西。
むとめてみすえてある。「柳人もそれ也。
とう二条。とうさうでうともよむ。
乃南町乃西。南小二町。忠仁公の家。息信公ここに撰集よ櫻云平乃
こゝ条。楊梅乃小。烏丸の西。
二条。近衛の南。洞院乃西。陽成院乃。
ここれも拾芥おつりあり
淸涼殿のうしとら
そよも例のそよ淸公
宮のべてもおくにはさらじ
荒海乃障おとろかすな
夢秘おいはに淸涼殿のうしとら
そくそのこゝろおよ荒海の
障乃繪乃事也。
長当小西乃陣よりは
陽乃綱代黒結二両
さ上乃陣高さのうち
昆明池の障よりを立
古今著聞や七夕の
のおうる布障ふを蒸
海乃障やとをなく
る長当ばちうとそれ
うへの陣はかね
敷政門をいれまうのうち
る時うへの体是の
のし紫宸殿小安殿の
上陣屋。殿上の上陣
屋をでおり三ヶ所陣
云ひ大のやうのうせ
ふわへ陣座教の陣座
のやうこの一間を上陣
屋おうふ宣ひ。
大納言殿　伊周公
し中関白道隆公乃
よ。中宮御所これし
見候間之ゆこれし

（注記）
勘解由小路乃南。烏丸乃西一町。道真公乃住給ひ多議是善の家
（注記）
萬壽寺殿と。申奉りしと。御歸洛の後。此邊火災よりて。神泉院とうつし
（注記）
奉りしかん。本い冷然院なりしを火災よりて。神泉院とうつし。檢
（注記）
朱雀院。淳和院乃西。二條乃南。西洞院乃東。四條乃北。四町。四条の小朱雀院乃西四町。四条の小
（注記）
小野宮。大炊御門乃南。烏丸の西。惟高親王の家。定頼卿これを傳領す。淸慎公ここに住給ふ。
（注記）
紅梅殿とう於。又条坊門の小町乃西。
（注記）
縣井戸於。一条の小。東洞院の西。
（注記）
柳人もそれ也。
（注記）
二条。近衛の南。洞院乃西。陽成院乃。
（注記）
淸涼殿のうしとら
（注記）
荒海乃障おとろかすな
（注記）
夢秘おいはに淸涼殿のうしとら
（注記）
障乃繪乃事也。
（注記）
敷政門をいれまうのうち
（注記）
殿上の上陣屋。
（注記）
大納言殿　伊周公
（注記）
し中関白道隆公乃
（注記）
よ。中宮御所これし
（注記）
見候間之ゆこれし

はくろのかきもぬ
桜唐衣ひとへてしらう
紫色と一条殿の紅袴
見わたりにねきてれて
ふかきかきはし肩の
切るとは便なる桜狩りうり
かちや中のかき　ここある
紫衣も着へをゝて紫
うる着物も山吹の衣ハ
とすて杉ちうゝ黄ゝり
紫衣のおりそ一襲便
こうでとこれみどりかなと
しゆさる　出舞者の
細口あかりさ不の節件
ミれ下とわかゝて出さ
胡曹抄云押出衛
落飾リ六角ニ袖不出裳
是定例也是宮出ノ
院所也又号蔵時押出
不出妻并ニ裳要月五
節之時押出袂常ニ出
妻并ニ裳要月討也　服進也
おくのかへる

あでそうしまみもれうちは女のつまさくろ
みかへきさねどもゆかしかりぬぎされて
ちぢやふぎさあといろくまこもしくは
小半節
書御座也常ニハひのさいそう陪膳の間にあり
まさこそどもこれみどりよりていかる
かとゝ月乃おかゝしんかるのぼらる出
陪膳乃…
をとよくろいあでやかしくとりふ壱
きこゆうらくとのかなりのらゝき
果御飯ノやど
いとおりしきには乃陀をんあてる花
人まうりておとゝのそうすれバあの松より
至上の陀…
わるしせの陀とも大納言殿よりせまに
至上の陀供…
てあをつかのもいへりぬまつり文
大納言殿…
乃陀まへ乃陀きちやしとやりてるめ

禁秘抄云凡御膳大床子御膳朝夕近代一度供
朝餉御膳朝夕夜侍皆一度供之此御膳等近
代主上不着下着又日
大床子御膳二六時ニ必可
着着御其作法蔵人
奏御膳時御直衣
帳後着大床子懸膝
着之東向陪膳跪候
此外紙のさ…
流の方へ御服進る
あきらくて至上を
いまさへ陪立の息
れどるや
ろくひあてしとはふこゑ
吉むる事陪膳高家不陪…
まうすもん人乃…
かくのうらすれバ蔵人乃…
玉を何ろ…
身も月もかくゆけども…
とて家…

まとうせさそまでるあでやかにちかごと
もあくより川そりめでさきをさくる
小人をとめすあさてちもをまり
月をはしかりゆけどもひされかれ
みむろ乃山のしのふぬるこゝとゆゝく
うちよみいろらくぬのてるいとおりしとな
おゆるぐあちょせもあるかげ
あるれおすきさめあるや
助字也
形勢地のうしきも也そうしくハ是者…
新勅撰賀　月を…

あさらく浪りハ伊周公隆家までおなじ遠流のうけおりもさ。
皇后宮ハ女ごと男子とおなじうませ給ひけれどもなをなくか
それをせ給ひ給いともしの御景舎をと申ちつぎさせらるせの定子ハ
彼清少納言もいろいろなひとらふ成出へきやうもあくなか
ゆきし終清少納言も待るおれさる所をりもすみ宮中のちさ面
よろひのうらうら此草子みられしも、に蕾をもちてふ思ひとの
ごとく此皇后宮の流罪後あはれの事を示るに出給
さし我並れ世をおもひやされ事ども終日のまま侍りおや
或説に清少納言擬形ちかくして出家して帝の得なり
見みなのよふかはいよぎさ誰生をとけて彼寺に墓をしそてし
猶熱きり見ゆ時は代々浪りして一旦ハおちぶれりど紫式部の
ありはつがらん筆ども人のもてはやされし侍るや

みなそれもせり　雅清ほ
まほるやせ此君のまもり今
八雲へと咲や此花と書を
古今序にも見ゆる人乃姫
みなもとのる事られハ童
も云けるに事もあれハまさうの
事ふてもけすてもあられよ
さ大納言殿の世おまで
おさるきの生まれて清少
上らふ二ばかり　中に上臈の
そしそろんて侍せんと
さしふれやよりひとく
此哥古今の何もよ御歌
乃君の清おふ花のめよ
探れたをさらせきる
をみてよみてをかり思
なの流さきかを経ひて
ならの事を流しともかり
よとまさる人今清少を君
熱の掟乃中宮たまいり
あるふかて此の世さる
うえとの侍せよりく
あられハ君すをまさ
る様よゐりく侍りやあ

こらをとせめさせまうけりおを侍るしてくるぞ
しかるすぐれてきこへありけるむかし
とひみさまおや。春乃ろさ。ぽの空かぐ
いつくも上ららふ二門と何かまて草おかふ
をくもれいとひハきぬきつハあれども花をし
見れハ筆書ひをまし。さらすもうとも見えてし
このまえでさりまさありるん。清らかなまて
此心はさらへて御代ゆかしかりつるかくちかるはせる
ほおもてたま。ろんゆうかかんの流時機おおあく
内もしおうもひとくりくけを殺上人におわりせ
られるもとにいうかきさかへてまかひ隠
人くありてるはよくまれおしきさらさ。夲

中らも古今ハかくありけるをやうく
かくれもなくさらに古今の御事にし

村上の御時　六十二代天暦
乃帝此代なり。延喜帝
第十四の皇子。御母ハ皇后
宮穏子。昭宣公乃御むすめ
なり。康保四年五月廿五
日崩御なされたり。六月
四日村上の山陵に葬り
奉り故に村上の帝と申し

せんよう殿の女御
宣耀殿女御芳子と申し
奉る。小一条左大臣師尹公の御
むすめ。源順が寛平乃後しむすめ

きんの御こと　琴ハ七絃也
河海云　上丸く下方く
元来　徽十三是
也。加文武二絃也。琴操
云長三尺六寸六分象三

百六十六日前廣後狭象
尊卑上圓下方象天地
五絃象五行

御物いみなりける日
禁秘抄云御物忌之時
懸不出御他殿舎中諸
事於簾中有之云々
又云以御物忌造簡三分計
挿御冠纓御放本烏
時付尤御袖書紙白紙也
云々　物忌とハ迦毘羅衛
國の桃林に住鬼神の名也
此鬼神の名を書て鬼よけ
することなり。物忌の
時ハ此鬼神の名を書て
柳の枝又ハ紙にかきて
て冠にさし簾にもつけて
こもりゐることなり。此海
抄に見ゆ

あるハあつまりつゝ中にも古今
おぼえてうたよみすることハみなおぼえ
ぬべきこと事なり。村上乃御時せんよう殿
乃女御ときこえしハ小一条乃左大臣殿
の御むすめにおはしましければ
志りきこしめして
おりしたる時。ちゝおとゞのをしへ給ひ
あひたるハ一にハ御手をならひ給へつぎ
にハきん乃御ことを人よりことにひきまさ
らんとおぼせ。さて古今乃哥二十巻を
みなうかべさせ給ふを御学問にハ
せさせ給へとあり

きこしめしおかせ給ひて御物いみなり
ける日。古今をかくしてわたらせ
給ひて御きちやうをひきへだてさせ
給ひければ女御れいならずあやしと
おぼしけるに草子をひろげさせ給ひて
その月なにのおりその人のよみたる哥
ハいかにとゝひきこえさせ給ふを
かうなりけりと心えさせ給ふもおかしき
ものゝ。ひがおぼえもし。わすれ
たる所もあらバいみじかるべきこと
とわりなうおぼしみだれぬべし
おぼつかなかるべき人二三人ばかりめ

こゝはかずをとらせ
女御乃哥さへよまれ給はずば碁
あやまち数をとらせんとて
碁石にて数をとらせ給ひて女御
まふやしつけさせ給ふ
流おぼえさせ給ひけん人さ
へこそ　中宮乃御物語なり
をきゝて清少のかたる
詞をかしき
さしうやがて末まではあらねど、ハ
女御乃詞也　覧けり一
首を全くよみ給はせ給ふ
事ハあらはなりしどもなり
上臈さまきこゆるを以て
いかでなをすこしひがおぼえ
ひがおぼえへとやきこゆん
此を以字八助字也。女御乃
あやまち見つけんとおぼさんと帝乃お
ぼしめすなり
けうさしにけうさんとて
夾算也
しるし古今集より

いで。ごいしてかずをおかせ給ふ
とて。しひきこえさせ給ひけんほどなど。いかにめで
たうをかしかりけん。御前にさぶらひ
けん人さへこそうらやましけれ。せめて
申させ給へばさかしうやがて末
まではあらねど。すべてつゆたがふ
事なかりけり。いかでなほすこしひ
がこと見つけてをやまんと
ねたきまでにおぼしける。十巻にも
なりぬ。さらにふようなりけりとて
御さうしにけうさんさして。みとのご
もりぬるも又めでたしかし。いと久

あしたよりすがらにて
此古今和歌を上巻から
これ迄おぼえさせ給へど
女御をいさゝかにも帝
のおぼしめしけるに
古今なくてしらぬ事乃
こゝろに
ことをよみ見あひ給へる
明日までのりなく
女御乃異本をも見給ひ
内裏
切燈台

しうありておきさせ給へるに。なほこの
事かちまけなくてやませ給はん。いとわろしとて
下乃十巻を。あすにならば。ことをぞ
見給ひあはするとて。けふさだめんとおほ
となぶらまゐりて。夜ふくるまでよ
ませ給ひける。されどつひにまけき
こえさせ給はずなりにけり。上わたらせ
給ひて。かゝる事なんと。人々殿に
申したてまつりければ。いみじうさはぎ
て。御ずきやうなどあまたせさせて。そ
なたにむきてなんねんじくらし
させ給ひけるも。すきずきしうあはれ

たびしかはらといふまで、いつかハそれを
はぢかくれたりし。とのばらなどハ、いと
さしもやあらざらん。それもあるかぎり
ハさぞあらん。うへなどいひて、かし
づきすゑたらんに、心にくからずおぼえんこと
わりなれど、内侍のすけなどいひて、をり
をりうちへまゐり、まつりのつかひなどに
いでたるも、おもだたしからずやハある。さて
こもりゐぬるハ、まいてめでたし。ずりやうの
五せちいだすをりなど、いとひなび
いひしらぬことなど人にとひきゝなど
ハせじかし。心にくきものなり

すさまじきもの
ひるほゆる犬　春のあじろ　三四月の
紅梅のきぬ　ちごのなくなりたるうぶ
屋　火おこさぬ炭櫃すびつ　うし
かくこゝろよしのひ
きかよしうませたる
かたゞがへにゆきたるに
あるじせぬ所。まいてせちぶん
などはいとすさまじ
人の国よりおこせたる文
の物なき。京のをもさこそ
思ふらめ。されどそれはゆかしき事どもを
もかきあつめ、世にある事などをもきけばいとよし
人のもとにわざときよげにかきてやり

内侍のすけ　典侍　相当従四位　掌同尚侍　禁秘抄　典侍四人也　大臣孫　有例
受領　十一月中丑日　常寧殿　五節の舞
すさまじき物　時ならぬ
春の網代　網代ハ氷魚の
三四月の紅梅のきぬ
博士　方違
大学寮　博士一人　掌教授経業　課試学生

とかいづる出てもゆかんと云
てる是金神などにあたる所
陰陽道時よ天一神太白神などの
ふさがれる方ヘハゆかぬを云
ことにいりては方をたがへ
て所で一夜とまりてまたゆ
くをいふ 捨芥抄に云
陰陽道帝本言中は乃方
ふたぐを内裏よりわ蓬上の
沈言に天一神おなじれる
おかしげなるなり
彼やりつる人此女
かるさりと彼のかたへ
物忌ありこそりつくしを
まつらでえとりいれぬ
とつけ
さるあだなる人
ともむつかしかれどら
むつかしくおもふ人のきらひ
もとよりおるらし

はる文乃。ゑへるすみかん。今ハきこぬらんと
あやしくおもひなからとまりつる
文乃むすびさまもそてぶくさもみとめてつる
おりてらるしうてごめてさうへよひき
いつるすゝ御へきしさるをおこせつり
なりおりかすさでまかちらしぞしハ物つき
とそとりいれ見るとそとそてなりつるは
わびしくすさまじ 又のあしたずくへ
人のもとに車をやりてすりまゐる
をとすれバさるあだ人ぞ出て見つるま
くるまやどりに入てくびきおろしてうちかる
すゝといろなるうとと ばかりハおかしきさず

うしろのかぎりひき出て
車ハ車入にいれてまへ
そうりいさそいそぞろきま
ましくさひきと
又家ゆすりて 家動さ
一家うちらここさての
こずうりぬる むしハ女
のをとく背のかひしさ
彼気智の我ら
になるべきへのらぬつるハするかわ
やりて
えからそまするへきをと往へ
人うまでかうひつきてろ
ハ又こるるうハ明ひらん
とはすてさき吟と
うへしこせてる
乳母のこ見えるさりき
とそ逆への徒をさう
うへしさし
女ともかくふとくもして
乳母をらすこぬさへおる
ますて女をよひかり
てごぼハ男の心ハの人と
むねすらつれて
まち人の車ちらつくそのも

わらわもそずそてもしろおぎろりひき出そてい
ぬる 又家ゆすりてとりするむこそ成
ぬるほとすさまじ。ならぬへき人のうやばやく
するがやりて川しとりとおかしわらま
し ちごれめるのぞはりしさるとてぬ
あるとこるもれいとりくあそびあかさめて
とらとりひやりするにもよいハえなつる
まどとそかへしはこせさるすさまじきこの
みそとおしめすかくさわりすけ女ともむつ
かるかとこすてゐるかんまり入おるも
入り。兵すらつけてまつのひやのきハを
いてあとぞむねすしはふれて。人出て

りやとさめるそするもの

ところやすゞきにとり給ひて
独鈷調伏ぞしよりまし
しにおゐてし
せしごとりしたりのむし
陀羅尼神呪など怪しみ
のことしやうに読誦り
異本にはせめごふとも
彼よりおもを責とり
ぞしふるともさゆも
あつめてかんじぬる
一門を集て祈り
祈念し居させ
さうにつゞずられて
文に験やおすそのよわし
を立のけにけり

とゑするりおゝねよしらむことのまゝのり
ちうくきてゑらうすさゆうじとりやすぬも
かへとくすさいじれ 験者くんぜやの猫の
けてうずうそへいゝじうちてりぐわり
とこやすゞあとしらせて。せいこゑよ
ちかり出しよみねられど、きうらさわ
げもあくごわりもはゞねばあつめて
ねんじねたるに男も女もあやしとせふ
うゑのかゝるまでよみすごしてさう
につゞずゐらねてそずどりをて
おれどげんすやとうちひてぴさいは
よりかくさるふからさぐりおげてはや

ちうしにつきさえぬ人の
又はきらてすさましき
縣召の除目ともあるもを
ころの受領せぬてまし
こうしいうらでもとけやつて
これは彼受領せぬ人
の家の冷しきをいふ
此正月の除目にも八必任
家人にも下ばりさとを
むかしのもおまして追従
猫をまても すれふにて
彼任国へくきく人の猫
宿にも供せて家へいも
の下ばりさちさむとるの
はいちうらせりくし
そうるあつまきまで
除目の男は暁かし外官
の除目は八九月よわ始る議
事は始めよりは三月
除目八

ゆびをよれうちくよわつぬる ちをと
ゑにつきえね人の家いゝしハかゝるゝすと
きそてもやうおるとしもののじもの かくく
あうはるわくるやあらすむものぞとも
あどみるあつまりきてい出入東北あがえも
ひまちくみて。猫あつでもてる術もとも殺
もくとまつりはのふすまりい猫くひ酒
のそりあつりあくつるりしそつるあつき
すでかとうくとうもせぬどおやし
あどうくそてきけむゆうさえうふ寺
起ちてく上東ゑのしみなか出のかの
きてに宿まりさむかりわすきたり

け　産養　産ての三夜　夜ふかく夜もすがら祝ふ事あり。馬鹿八張弓の人かねてより　雲圖抔かきて　藥玉をかくる　何時も續命縷　靈縁　綵縁　綵索などかくる　今もかくる事也。扨凡俗通ずる事。今女わらべ抔迄もしてあそぶ　細流の邦材と　趙藏人更衣　結構畫御帳　懸角柱　副立細木　遺代九也　失錐　暑記　内裏　諸家　江次第二日　緑所進部　舟乃事

うつやの内ぐし共　よりもまゐるもの　ようせずして

つとつゝみてこれかれ　ちゝはゝも　あき孫乃心をこゝろ

ねぬるそしておかるゝ　寢おきてゆ　寢ぬる事よりおそれて　すきまかしきそ

ちごやしなひたるに　元日七日も晴やうにきて　しばきうく冷まじき　二月八日乃ころ　終ふ一月乃精進を懈怠ふてつゝしまざるも

八月の三日ね　白重八四月綱目更衣　乃衣ふ八月ふ八日ふ　山ぶの乃千木垣根も　あるまじ　懈怠せられ退出せられ　精進の日は　勤行八懈

ひこうらく　ねおきてあそぶゆ　くぐおもてなどもの　すゝほどろの　ちやうぢんの　八月乃三日ね　白重ふ　ちあへぞ成ぬる

急ぐ事ありて帰るなどいふ
月などをいふなり

いうぎ　奇異なり　日数をへて
家の人のきたるを　退屈こころもとなし
人うちあつまりて　南面して　あるもの
物語などするゆゑに　おのれも
おとらじとて　人　とりもちて
あそぶ　ものくるき女　洗ひたく
心あらん物語　心底深きの
事にはあらで　ただ
あづかり　自他の心づかひ
あるべきもの　ぬりふみ
けしきなどを
いうぐるまの　ありふるも
ことなし　五月雨
よもの物語
のちまでも
思ひ入れば深
陰火のごとく

れいおるまはおりて
学問居るあひだは
験者のぬぎたる

からくもて　幸の法
やうやうとこころみる
ものけうごりして
困じ　日比物のけ調
伏ども弟子ども
座をしひらく
おもるしおりこゑ
陀羅尼をよむ
おりてゆくも
うんでう事もさへ
無何条事もさへ
学問故実もいさ

いうぎ　奇異なり　日数をへて　退屈こころもとなし
人うちあつまりて　南面して　あるもの物
家の人のきたるを　語などするゆゑに
人　とりもちて　おのれも
おとらじとて　人　とりもちて
あそぶ　ものくるき女　洗ひたく
心あらん物語　心底深きの
事にはあらで　ただ
あづかり　自他の心づかひ
あるべきもの
ぬりふみ
けしきなどを

ふすまもて　験者　ふたりてきたる
ときこゆる　ふたりまゐるべし　人乃
あるべきなり　小さなるもの
小さなるべし　ものなどいふ
くるべし　ものなどいふ
からかさ　持ちたるもの
らかぢ　持ちたるもの
ごろじにて　ものけ
もちわづらふ　ものけ
し　何ごとをもいふ
ええず　ものけ
火ともしつるほどなれば

いひしたるねをばえんじしうるさく又わづらひ
悉やそのかへしたるなり
をうねうしつやうや
わづらふきうわさるゝすぢ六
此比よとしゆふれたる
般若古語とぞしらとし
ちくべつふ調云るやうそ
事なと穿鑿するまゝる
あへし
つくしあれあつまりて
そもふうき物あれ一門し
はるかすがうあながちなる
あり　さるまうの人寝
さすがすぐき所あれども
わりなきさ経られべきあるが
ちまかへてねまゐする
ほどを人ハ目の用ゐそし
あるさがみくさきて
あさえあり　たてく
よそながし見てるまや
うよろさいひせてる
烏帽子あれ物ふさゆる意也

いひしたるねをばえんじしうるさく又わづらひ
きこゆる事をばわれとこりたりける
事乃やうにこそ人ひとかたならずしてべりつるを
いとあやし　物きかんとおもふほどになく
ちごからすのあつまりてとびちがひ鳴る
しのびて来る人見しりてほゆる犬あながち
(かくしふせたる)どころ門べし　はるかすがうあながち
なるありかくしふせたる人乃いびきした
る　又そうのふにしのびくる所にまぐなが
ゑぼうししてさすがに人にみえじとまど
ひいるほど物につきさはりてそよ
ろといはせたる　伊与簾し
かけたるに

色わりのすそ　帽額(モカウ)
簾(ス)也。木瓜ともくし
こもき物れうべりてて
こんじうきはきの引ろ
きそ落る音する心も
すこそ乃ハ鐶(かこ)匙也
やをうひきあけく
やうらにうろくきふ
掲げせ帽額(モカウ)乃簾(ス)に八
ぐしもても音上て
出かハあり出物をふづれ
目をこゝろきをふりとき
えかめし　さそめし
とよむでしぐるくする
宮し家葉にそでこり
おさのことごとくするを
これめく　こらくさする
こうし源氏物語にも簾
風にてむ音もこひくさを
そかせさくあれかかり
彼らいくさきあれあれくまね

などかけたるをうちかづきてはらくと
なりしたるもいとにくしげなりすそ
ますてこはき物乃うちをかるゝいと音(さらりのくちくるき)
しるしそれもやをらひきあげて出入
するハさらにならず　又やり戸など
はくあくるもいとあやし　すこし
もたぐるやうにしてあくるハなりやはする
あしうあくれば障子などもごほめかし
うほとめくこそしるけれ　ねぶたし
とおもひてふしたるに蚊乃ほそごゑ
にわびしげに名のりてかほのほどにとびあ
りくはかぜさへその身のほどにあるこそ

風にて新まおくりて
みおきこし
我のりまる ゝみきし
ひ車をのりて我のり
まるぞらむし
さいまづる 才狂や
人をとゞきさ理を抵て
我才覚をあらはさん
とする也し
かくいそいひそくし
謡云揚とやぽ細銘ハ早
吟ふるやしすびひさ
ますさるし
らうさかりて 労也
ろうりいとくせまし

いとふくるれ きらめく車にのりて
あるしきのごとききのねしやあらん
といふくへし我のりまるハそのくるまの
ぬしはまくし 梅ざり寄ぞするに
行出て家ひろりさいまづるとのすゞ
てさし出ハわれるもおくるをもいとふへし
むすし梅ざくり寄ですまふ我志りさ
まそるハふかと出くいひそくしおする
いとふへし ねどみ乃そまはまく
いとすへし あかしる面まきてするとど
とわりくぐどらうさがりて おりしき
とのおしくすまよおひつきは

てらぢやうらはれし
調度よろこぶさと
いふてや乃字ハ調度
やはやとりふ得るし
一説 調度屋ともいふを
とびいれ居るさ
いぎさるの 寝ときき
事くし居志乃かです
れども続そうれて
ねきさねをねごきと居
ちかのかりふさ免れて
得ま面かりれ 新条の
このいさしらわ作若
まれて梅おはいぞ
あるよ云 居んまず
するがわかきく
わり志る人へまて
只今おまりかまふ
ま梅花中みそし
ますさしはやり 呉今

きてぬいりくてうぞやうらはれし 居入て
ぬるふくし 家りてともやはりひ而 松乃里亭と
みそもいりてあるとあんどおり人乃き
まるふさくねをまさるとわがそふ
あるとのぞも代かうしわきてならぎ 従者て
さまし上さひがわよひきとゆるぎする
いとふさし いま面いり乃さうそて
とのおりがわよ来しへやうあること
いひうろみするとふくし わが志る
人まておるれどもやうしての女のるま
かめついひ出しずすまもなりて列べへ
まされど寄をふくしおしてさしはやわ

目れおほき二たりく詩
乃ちのく
さしをおしねやしもたき
さしおよりし事
りし
八事ふちりてさもれきら
ら出ちくし唐のあゐ又嫉妬
を恥さる所あり必とつく
べし
よるひて誦文とる人
是本をよらひてつかう
ずんじおる人とあり
面白きものや誦じ給る
と文をとなへてやすらふ
ぞ捨妬二人を帯の嗟時頌云休息
万余急々如律令
まうくしく　ましるふ
事かおもいとしやく
めのとの男とらはれ
乳母の夫とつふていふれ
との成人世俗よおいてハ是
とのく
アやうとて　領之偏ふ
我相とするさあく

よろこびおもひやられされどされ
はさしをうしねやうもおありりし　えうす
ひらく誦文とる人太りし家れ男ちつる
でハうくなるひするものいとかうし
のみもほとふりきいねれ先ふゑなより　蟄
あるきさてぞとこぐるやうるするも　又犬
乃をんこゐりあがくにあきこゝのけさる
まうくちく小づてし　めのとれおもくとお
あし
とかれ女ハされどらりくをよるねはし
始のとでをバっでわり相ふちてこうひ
アやう志てうしろといさてもせ侍りす
よのそく　りしふふとの疾ざれし人をでひと

あやしきれどもかうきうと
乳母が夫乃権弁与侍するを
れどをさふと誰いひわ
ふうと人へとあされども
やごとなきひがでちるま
かやきるよりよく乳母
乃夫ハふかきさうのかう
とやかうる御得もし
小一条院をハ今内裏よう
拾芥云小一条ハ近衛の南
洞院乃西師忠公乃家
二云山吹殿清和天皇
誕生乃所貞信公家云と
ぞ。いふても大内裏のみ
のりを今内裏といふ之也
まえ時よ天子のおハします
摂政は堀河殿よ円融院
おはしまして内裏ていひ
ひとまふりて八一条院
乃坊なりく
うちまかれの大弐
高遠　小野宮関白実頼

こともおぼしまし。あやしかれどされ
心がまへ心よ手乃世てい人をあれば
示江いまきれとちぢくまをとこ
あひあでしきてらり
小一条院を今内裏とうけおはします
殿も清涼殿のくうのかうる殿よおり
ます。おひしハわたどのみへわたらせまふ
はねより出のかう世ますおん八は
あれバお裁をとう給へます世ゆひていと
おりし二月十日乃日れこくとあふ照
まことよわさどの御乃ひさしまで
うへ乃流留かうせのかさこうの大

この比縁起と儀式経ての
男大宰大弐正三位
楚秘抄ニ云管絃一条院
十一歳円融院被傳申然
而大弐高遠為御師範
このひとをおもふべし
催馬楽律 高砂
ふたたびこれさいはひこその二段
そのへをまうす白玉椿
玉柳 下略 梁塵秘抄二云
わかみにせりつきてしるべし
ゆるされたるやうなれ
心にかけてやむ事なきやうの
教へにもの云童蒙抄云
せりつくしき人をわか
ごとや心に抛れてもみざり
文選乃山巨源と
あひする絶交乃紙に秘
書注云竹をおさめて
しるし事を重んじ長ぜ
これ里の事おもひしてそ
先もこれをうしときこと

或はやむごとなき師をもとめ笛の手をもならひ吹きかよひて大宰の師の師範をとりて
笛のあるじ志つかにもとむるものなりとて
わが世の人ならぬを思ひかけ
いにしへより伝はれる人の師をも
これらの事どもをさめて
ここもとの中宮の温子は女房に伝へ
おもしろくは我が身にせりつくしと
これはゆかりあるかれすけたる
本五乃たちおはしく義人に成るべし
こころなしく志づかなれは厳上人
女房にわたしたるをさけるものぞ
よりしては一くれの出でたる

されば此度はやむごとなき我身に
よしありて伝はりたる
御ためなれば
めでたき事也 略記
すけたるはくれたるな
て義人にたまはりける
勘物に云長保此名字
蔵人所見ニ本五乃宰相よ
正六位義人に叙せられ
あつかはしくこそつけさる
なりてみゆべき
にてなかりけるなり
名あるべし
こなたかなたのまたに
伊勢源氏夕顔に右近の君
うとおもはるるなり
にたりとらぬのとりの
どのさね
すけてとるさ
またまかりて
こまかくとりぎはなり
兼時が女のためにもとめて
さいはひにて帝に奉る事

うどの乃ほねあはしかるさうふ
尾張乃かねときが女をもとめてこれ成
かくこれをかくふかせのふたつひ
さかくておもふ世にかくせ
にきてはしうとや世にさかなり
さてしてありしとしとてみつのし
かりせのおもとにかうて世におそ
かましてとのきみにもいかう
かかめとあはれてかせのあるし
うかり
無右左右の琴にて
無左右主の琴やそ甚
帝ふかるまかれふひかて伊勢八

いへばうぐ
こそづいこ
をうも
よわかうめく
物をいみも。きこうめうんよいあぐくい
丸が那どいそばんかうかく
そんうわろうぐき事こと
ろ。ひ
とりぬ人のふくけこそ。
誰
とり車ふのりく物乃。男いうう
みのはんや

なるをぬべし。やをら引あけて入ぬ。人々こゑづくりいらへんとすれど、えせざりけり。女房ども、「あやしの事かな。いかなる人にか」などいふほどに、「ただ今のほどこそあれ」とて、ひとりもせんさうする人はなし。

あやしの心しれの直衣姿（ひたゝれすがた）にて、如此（かく）ともいはざりつる事を、いかゞ思ふらんと、女房の心ども、あやしがりさわぐ。

女の明けぬさきにと、そゝのかしいだすに、男の名をぞ、いとおしがりける。

あふさきるさもなれど、おいらくをゆふつけ鳥（どり）の名おひ鳥ぞ

やそとをもるに出ける。

源氏総角（あげまき）巻宇治の中君の寝ぬ朝（あした）のさまに、明けはてゝ、女房の参り込むほどに、

あふわさもすもなれど、おいらくをゆふつけ鳥の名おひ鳥ぞ

やそとをもるに出ける。

源氏総角巻宇治の中君の寝ぬ朝のさまに、明けはてゝ、女房の参り込むほどに、

ひとりもせんさうする人はなし。

あやしの心しれの直衣姿にて、如此ともいはざりつる事を、いかゞ思ふらんと、女房の心ども、あやしがりさわぐ。

女の明けぬさきにと、そゝのかしいだすに、男の名をぞ、いとおしがりける。

なるをぬべし。やをら引あけて入ぬ。人々こゑづくりいらへんとすれど、えせざりけり。女房ども、「あやしの事かな。いかなる人にか」などいふほどに、「ただ今のほどこそあれ」とて、

ひとりもせんさうする人はなし。

あやしの心しれの直衣姿にて、如此ともいはざりつる事を、いかゞ思ふらんと、女房の心ども、あやしがりさわぐ。

女の明けぬさきにと、そゝのかしいだすに、男の名をぞ、いとおしがりける。

あふさきるさもなれど、おいらくをゆふつけ鳥の名おひ鳥ぞ

やそとをもるに出ける。

源氏総角巻宇治の中君の寝ぬ朝のさまに、明けはてゝ、女房の参り込むほどに、

ひとりもせんさうする人はなし。

あやしの心しれの直衣姿にて、如此ともいはざりつる事を、いかゞ思ふらんと、女房の心ども、あやしがりさわぐ。

女の明けぬさきにと、そゝのかしいだすに、男の名をぞ、いとおしがりける。

なるをぬべし。やをら引あけて入ぬ。人々こゑづくりいらへんとすれど、えせざりけり。女房ども、「あやしの事かな。いかなる人にか」などいふほどに、「ただ今のほどこそあれ」とて、

ひとりもせんさうする人はなし。

あやしの心しれの直衣姿にて、如此ともいはざりつる事を、いかゞ思ふらんと、女房の心ども、あやしがりさわぐ。

女の明けぬさきにと、そゝのかしいだすに、男の名をぞ、いとおしがりける。

あふさきるさもなれど、おいらくをゆふつけ鳥の名おひ鳥ぞ

やそとをもるに出ける。

源氏総角巻宇治の中君の寝ぬ朝のさまに、明けはてゝ、女房の参り込むほどに、

ひとりもせんさうする人はなし。

あやしの心しれの直衣姿にて、如此ともいはざりつる事を、いかゞ思ふらんと、女房の心ども、あやしがりさわぐ。

女の明けぬさきにと、そゝのかしいだすに、男の名をぞ、いとおしがりける。

なるをぬべし。やをら引あけて入ぬ。人々こゑづくりいらへんとすれど、えせざりけり。女房ども、「あやしの事かな。いかなる人にか」などいふほどに、「ただ今のほどこそあれ」とて、

あらはこそ出でゆきもてつづくるなりとしあけてそのつとめてそれ人いとふかうそしも殊更なるおとしもなくとりいでにくげなるこころときめきをするものうつぐきいそぎもてきぬるをみもねさりぐをもちごあそびをするおのの
唐鏡也（からかがみなり）
今が明りにれすきうつしなどするこころときめきするものうつくしげなるちごのすずろなるものをもてきてとらせたるにつとにげてかくるをおひてはしりきたるをとりてにげんとするをおひかくしてもてきたるにやがてとらせんとするをおれがおれがとあらそひてとりつたへてみるこころときめきするものうつくしげなるちごのあそびにうつぶしてかみをかきやりてみるをおどろかしたるにおきあがりてにらまへたるもにくからずうつくしげなり
案内（あんない）
せさせてする
化粧（けさう）
しかほにすずろなるものをぬりてかくしたるをとりてみるにかくしたるをとりかへしてにげたるをおひてとらんとするにかほをおしあてたるもにくからずうつくしげなり
雨脚也（あまあしなり）
ふるあめのあしのはやきをみるもおもしろし
絹（きぬ）
などのさいでのをりたるをみるもおもしろし
双六（すごろく）
をしたるもおもしろし
すきこのみてするものはいとおもしろし
おれまさるなどいひてうちなげたるもおもしろし
二藍（ふたあゐ）
などのうすものの
月（つき）
などのおぼろなるにおもてをうちかくしてゆくもおもしろし
車副（くるまぞひ）
などのこどもなどのおかしげなるもの

おれまさるなどいひてうちなげたるもおもしろし
賀茂（かも）
などのまうでなどするをみるもおもしろし
細流（さざれ）
などのながれたるもおもしろし

こがねづくりの
蝙蝠（かはほり）
扇（あふぎ）
河海（かかい）
抄（せう）
云（いふ）
蝙蝠（かはほり）
をとりて扇（あふぎ）
をつかふ初（はじめ）
つかた夏（なつ）
の扇（あふぎ）
也（なり）

こころゆくもの　世話（せわ）
なる人（ひと）
の
物語（ものがたり）
をきくに
物語（ものがたり）
女（をんな）
のもとにしのびてゆきたるに
車（くるま）
一（ひと）
両（りやう）
にのりこぼれて
車副（くるまぞひ）
一（ひと）
人（り）
ばかりうちつれてゆくもの

[illegible]車 [illegible]
檀紙也
[illegible]
[illegible]
[illegible]

唐廂の挟柳をへ車なる
いとひさいひこちいさく
尼眉半部細代等ハ
皆おとろを上うう

まうづつるこる
班女きこと
あけ芦毛白き馬
うう

めしおこるもいとうるき
驪うづ尾ても白き
てもしおハうるき馬こと
ゆの十余三てれ緊白き
鄭恒集よるれもを候
する母のゆふゆうと
ゑとれハやせうす
めるものゆがうぐす
おりかいうる
ばよきき 美人不の雑
色よかうし千ら従家よ百
ていぐん本眉の陸船

小舎男ともありぐれハ
お村うの百ぐせる
る小舎男ともし
ことうり
河海抄云小舎人ハ童
乃無名也 ゆるる中歩
物乃百ぐるとる童を
小舎人とうも

ゆやうくぎき
良こせよきうとも
う乃うきり乞ろて
猫乃宵のよいうくう
ろうも
読経師 法師ともる
修うり
六月 より月ともと
ゆぐ 新ゆげる修ハ
新をえねうる法ゆる
わもそしゆ新ゆぐハ
れ修ら罷ごんとゆ
ごうのうろきねう
ゆきハ新うおうの報
乃罪えぬぎうの羽を

ろうとりゆ
ゆうきゆうくこうくこうくこうハれうき
うん人とおゆる 皆白きと
てかみるきろうん 読経師ハ
おりうてゆ 新きほきうくうきとく
事乃ゆれ お月ろつれで
もわそうくぎゆれ ハつうやうん
りんとおかゆ 修師の新きを好ゆ新ハやうんも
ごれことぐ ともべしすう
うゆのよろきりぐうかやうの罪
いえぐろ乃ことぐかき出をゆ ゆきつぐ

出家の後、今の年まで
終には罷りならぬ事と
て、……
思ひ……
事もなく……
きらふて……
説経するをやめにて
さ……
……錢つ……
……寂……
……
ゆ……
……の人……
……

蔵人……六位蔵人
八四ケ年の……
……
……六位と蔵人
殿上……
蔵人……
……
蔵人の五位　蔵人……
……蔵人の五位と

おもふ　又……
りとて世間……
かきたる人……
説経……蔵人……
供奉の時……前駈……
……
うらわかき……
蔵人の五位
とて……
……
……説経の……
……
ゆくを一……
……
……

て親撲にするとき
職原抄云　六位蔵人四人
重代諸大夫中不放埒
有器量之輩補之地下
諸大夫多以是為先途
雖五位以後以蔵人五位
為規模之故也と
うとさあぬ　蒔二藍
花色云支乃直衣乃
いろ
あをみ……
蒔……花田……
けの……
……
河海云十月八……小袖……
……冠……
……
三すぢ……
流冠の……
……
……烏帽……

いとおかしきものがたり　いとおざやかに
うとましきあねはものの……
……
けるはなべき……
……
ぎまでそのする……
……
つきてるをしきおる……
……
……
……ひろげて……
……笑ひ

かゝる此三四人の混出て
又もりさんげいかうしと云ひ
先にも彼三四人のおし筋
念佛付て説経よ来りて
の頭をうつし来る彼の
人も此又和尚よりぬ先
やりそひやうも其と
こゝ人いおもて門やうと
経ゆあど聴きせぬ人
をうつるる所じ夢
人いま清せしみやけ
り美清せりまん今
ど定りきていうそく経
あさ[illegible]のるまし
披露人の経がやに経
ゆられるもめさど又
一向まよつぬも此と
の事
られいとてもまめつる六
あり是女乃寺よう
でかむていかれるどし
まそまりかひつるかれ
あまりしとも
ほどやさうく

又もりさる人をいかしとおもひ又もりてね、
誰ありんぞれまやうれりやとゆきとて
おりひやうしこそおりかれ。説経も門八
おりもりおびへひつらつきのごらん人いさ
いやいいぞいあどならてにいとれるぞは
まりありあるともむげはけのぞり
でいおしん。あやまさご女ざふつとしゃ
めるそのをいはれバとてもどめつるさ
そありおりきしする人いあのわきじ。さ
まさらりいはずかさらずしかどもり
ちるいあまめ筋さけさるだてころお
アらしの、それを押ありてみどもせし。説

河海抄に傀儡はのしゝと
め也説ては市女笠よう
すぞ想まる女をとつ
がさうくとてゐく。
孟はわかりつがさうぞ
くとかきとめてわかる
こうるあり
わるいと云る本尊一説
菩提樹院あるや捨蓋
神楽岡の東二東門院
の任所とし但不審
ことめてもるてれ此所
清水の家集よおり。千
載集にも入り。心は継
求めてもわかる菩提の
跡にこそありあかれ。
それをきこえて濁世にも
みちりかもとし蓮の
露に菩提院を建で
上求菩提の心ともより
ありりけり家業世事
をと云て菩提よ入しか
はるかにやむ 別勘

経あしくこそりけれくをもきのぞりきさ
けぞらしろあそりけり出て人のものおぐ
て乃おしかバかなむりかうもり人をうけ半は
おざいといふ寺よけちえん人のりせしが
きてありますでさるかっ人乃うきしわ
とくかつりある人ことはりくしとのひされ
ぞもちすれきなびしく
まとめてもかゝるそちすれ露人をを
きそしうきき世よ又いかつる物かつとりきて
やア門まとたいとうふとくおかれ
あれバ此すてともれぬべくるずおがゆくるさう
ちうが家の人乃こどのしさし[illegible]

小よし川
小一条大将 師尹公也
おや小一条左大臣と
いひしと世にいへり

夜もろもろい
暁霞もつも起出て来
これ八参詣の輩までと
ゟ條ゟく立ならびしを
こ門そかわまそい
座小これ名さし車
乃第一乃車第二第
三の車などゝまそて八諸
のきさとゆべしとて
六月十餘日 こゝなつ
とをりありとよむき
花寛和二年の六月
ゟりしや此時義懐
の出家ありあり

左大乃かくしと 当時乃
左大臣八源雅信公右大臣
八藤原乃兼家公なり
や

やまとしるの寂鞆
藤原安親にて山蔭の
中納言乃孫。従四位上
摂津守仲正乃三男。
安延元年十二月十一
日参議に任ずる由
正三位補任より見ゆ長
徳二年三月六日卒
六十七歳
わくやさしらく
安親にて寛和二年の比
八五十七歳なれバ老人
あづき装束八よそやさそ
まうりいしもと

こぼるかりとい小雨そ小一条乃大将殿乃
信家づうし これちく上達部 けちえん
乃八かうきのあまいちしめそしさき事は
世乃中此人乃あつまりゆきてきくぞう
りん車八よるべきやうとうしとひで
霧ともりいうさ物さてげみずひ
ままあかる。あがきん乃うへりみさしりき
わそでこ門ぞかわそて心すう抱とき
こゆへし六月十よ白かくあつきける
世り志てねおりでありいけ乃きちを
をみやるのこぞすうすしき心ち
するぞ右乃がしちそときなり

ておそせぬ上達部ゟし。かうあね乃
あそしちしぬきさ。おきこさのうさひら
あうすへてゐすうしかとるすびのつるハ
あそかび乃さしぬきさ志ろきこゑるを
すぢ志けあり。やとちくれ寂鞆を
もわくやさしづちへくすへくふと
きこえのかおわのもいのずおりしきい
抱えまりひさり乃みそとうくかき
あけく方ぐしのう(へ上達)おー
くりむのひろく あがくとねのつう
こちよ八殿上人まきここんへちかり
さうぞくあそしあでもいとかうくて

さねかた乃
藤原實方 小一条左大臣師尹公乃孫、侍従貞時乃男、母ハ左大臣雅信公乃女
あそんたち 是も小一条乃家の子と見へたり 未考
三位中将とハ関白殿の子
中関白道隆公也 大入道兼家公の男 母ハ摂津守藤原仲政女・円融院の
永観二年正月七日ニ従三位 中将如元 一条院の
永祚二年五月八日ニ関白三年
ほのぼのとわらひすゞしける
春中ハ浅黄乃帷子をすゞし 小の上達
白き練りを凉しげなる

ぬるほとゝぎすとてかしこまりてさふらひさ
ぶらひあそびてもけしきさねかた乃
朝臣の作者乃あそんの侍従なりし家
乃ことばにてすこしそむきけるが
わらひあるさんざちあさいとおかしうて
たちまちすこし見けるからに三位
中将とし関白殿をうきさらしかうの香の羅
うちとのふきあはれなるおもしろきに
ほしぬきことすさの清らなるけしきも
まうかたろきひとへのいとあざやかなる
るをきみひらかぬしてまつるさかり
まかりひすゞしけるをみるおかし

中納言と申公の出生
あつめしのでめでたく
ところ
おりわりおもしろくて
細流骨也 顔形すぐれ六番
ざまなれバ歌舞ハ人に
ありさま也

よしちか乃中納言
藤原義懐 一条摂政伊尹公乃男 母ハ代明親王の女恵子女王也 花山院乃寛和二年権中納言従二位 公卿補任
上達部の流名をかく
へきさつもなりけりぬるを
義懐ての名をあらため
おさとりさいふさひな
花ざくとおさやかのにぞ
ともなれぞ誰ともかれ

きけあるべかれどいとしうめでたしとぞ
そしのふかうぬりおねきとおねハかられど
てでおくさかみを掛のしなきにたちつゝ
ひきちまてるハなでしこのいろぞゝほきこと
あふぎいとよくふくるまさ講師との
かざねかりかけたんども立てはふか
ぞけりん縣まいるべしよしちか中納言
乃清あるさまるこのわをもまりてハさき
よけまかさするさまかきりなきさや
上達部乃清名なれどかくべきすもなりね
たまふれまりなんとすこしかれ
いろあひなかくさりくしう匂ひあさやか

懸盤 / 講師 / 此後出家 / 始ニ事ぞとちきられ後ハいふもの也

ぬまさ山人乃帷子を見
こめて直衣ばかり見さ
まゐてやうへて来すきを見
やりまひしき由を志る
さんそて出るとの也
又出人あのえんを
うをききえし
ひつまかりされハ
猿流乃牛車ども隔らく
もらあつれバ彼車く来
るる妻も池あるるうる
もうふちとく
人乃せうそこつきくまて
人乃ひひやる消息をらく
いひ物すべき者あく八一人
やとし多くも彼は
すりて女牛車に物ハ皆
人として
いかに多くの行人見えて
何者ならん実方乃擇ひ
よりてひきこめてしかせし
やまのうちるハきこえても
こもひやりなりて後か
のうえきこえぬよく

よいづれともなき中のくるしひを見て
さとりてなをしいと例をきするや
うかくはしより車のうしろを見をこせ
侍ふ程などいひをこせすおふおうしと見ね
人あのえんを隠るさる車の内よ
をしかりえれを池りひきよせて
さるを見すひてはさねりさのきこえり。
人乃せうそこはきくまていひつべうん
をのひとりこめせていのある人まはん
えりくいておりしてるまいかでかつやる
べきとらりくぬまへるばかりりいあつせて。
やうまあるん車いさこてぬいらしくよう

いとしくようひ志く
彼消息ハ作る人乃よ
うあひ志用き志てゆく
さるなり
又しくされバ侍乃
迎をあらく車の
をもふ又しく立てハ
弄すらもやおん
迎の車にハあるも
てかこともんべき遠
そう用をせずと実定
のをて
けうらの人顕證人也
こそてハあるの也上
ま中のうらずかず高
乃種元ゝそ彼牛車を
又やりし已双の塊
おかるすさらするや
実方一車ゆてくまハ
あらず彼あるを行つ
それて侍のくでくるへと
使かのよりわりてる心
よりむし物も
えりのつるれふ　さびり

ひきく車乃もとをあゆしよるとも例をし
わるひおふ御りのうちよりく入めりて又
あてそれハ弄すでよもしやおん象
侍迎しおすひまけよあどわつひくから
しのかてうこともきそんをたとふ上達部まで
みをうさいさるりえやわまらり笛ふけ
そうの人くやまで見やをしをおりしうを
しをかかり車をさしいるふやすこてあゆ
みうるれどりあつぎをゆし出てよひ
かへせず弄すのをしをいひあやまら
てえわこそうよひのへさこめえしわつ
鞍取りあるへき車のくあれども

藤大納言　勘解由次官為光七
月廿日右大将　四月廿四日任権大納言正
暦二年九月八日薨　恒徳公

つくれんとるのおハ
孟津ニ細繹まま選百響式
細流云かくらいハ選あるさ
まろのあるゝ心しらのを
すゑてしもむくし慶葉六
女車乃返事此あるとき
まをかけると批判也
あへぬまのてくらうしき
曲節おもんみハ此車
まてけかてきこえる
かのりくりしくの心
廿二ん 勘物云清範法
相宗播磨國人字清水
律師長徳四年権律師
ニ真ハ福寺の法相宗
而て空晴僧都の法孫
旨朝已講乃上足・法
法華双まてハ殊乃絶
身已東欽頂あり
やんるま車ともに清少
出なんとて我通り出べ
きさの車よ案内さく

人のかゝるかたんこそよりハかゞふとめく
て中〜いとけしきだちたるかゆる。ゆくて出展
らじせいはんのかうざのうへもひかりみち
たる心ちしていみじうぞあるや。あつさ
のわびしきにそへてしさすまじき事の
けふすぐすまじきをうちおきてたゞ
すこしきゝてかへりなんとしつるにしき
なみにつどひたる車なれば出べきかた
もなし。あさかう果なばなほいかで
出なんとて前なる車どもに
せうそこすればちかくたゝんがうれし
さにやはやばやとひきいであけて出すを

おいかんだちめ 老上達部
すこしおりしかるかんだちめ
ちかきにいそてわかれ
やゝまかりぬるもよし
やゝハ御やすみぬるも
よしハ退ぬるも佳也
心ハ清少乃名座のとき
て出るを法華経乃方
便品り釋迦如來爾三
顧一乃法法をときれ
ける時五千人乃
増上慢乃比丘座を
起て退く如來黙然
として制止あつて今
利弗ハ如是増上慢人
退亦佳矣とのまへし
をふまへてしかり
乃心也
五千人乃中ふいらせ
給ハぬやうあらじとの
事ふよそへていひかけ
たまつさまへしらるを

見給ひていとかしかましきまでおい
かんだちめさへわらひにくむをもきゝも
いれずいらへもせでせばがり出れば
権中納言のやゝまかりぬるもよしとてうち
ゑみ給へるぞめでたきそれもみゝにも
とまらずあつきにまどはし出て人して
五千人の中にいらせ給はぬやうもあ
らじときこえかけてかへりにきその
はじめよりやがてはつる日まで
車のありけるに人よりくとも見えて
すべてたゞあさましう絵などのやうにて
すぐしければありがたくめでたくこそ

退出せんずるの心
あり。彼方此方の法度
をもちひずよき人のすゝめ
にしたがはんとす
姫中納言ちかく給ひしの
よきへんなりし。中納言
のうちかねきよしと
ほかにとの御ひし首尾
あるべし
これらのおもむきに中納言
のかくしに　是寛和
二年六月廿余日に花山
院出家させ給ひし時
侍ふ義懐にて法師に
成給ひし事也。袋草紙云
花山院御時中納言義懐
ハ外戚惟成弁ハ近習の
臣にて各天下の権を執せり
されて出家させ給ふ時に人開
きる又義懐に語て云外戚とて
世にありし時ハ早く出家
籍ありて同く出家も人の教訓によりて
思ひきり給ひし事也

ろかくていかなる人なりしやらんと
ことひとくさぞやさしく義大納言なりしが
さうくにふかくしゆかしき筆すさみのおかれ
このまひるころおもしろさてこの
二十日あまりに中納言義懐のかくしにあり
まいりこしおもれなりしにちかく
のちりぬるをよのはかなりや
をよそれとぶにてまへくとおもね御
あるまじきことてすしし

おもむきに義懐の心をすゝめ
をとゞまりおはしけり
七月には　七月のこゝろ
の残暑もそよぐ風の
草深さるも

いとはやくなるころの
板縁の清きをして
おくの如くたゞそよぐやうなる
がおもきこゝろ
凡帳ハ女の形くすさめ
[illegible]

あけちかづきをおもはゞ月のころ
七月はえんづきしおけれバよるけの雨
ねおきそれいふとも、とおしやけと
人たりし朝がほさいふとつなるを
いとはやかなるころのちらふあざ
やかなるてふひとひらめり
うちまさて二尺のきちやうおくの方
ゑりをやうすきあちとさまさげし
にそうろうへなれかくのう　ろうくさん
よ人いづくよくるなるべしうとりの
うしろとてうへハすこしてうる

家乃くらもとにふらうろして
こまさ紅乃すそにうちしまづ
けふする心にうちさうさ又
はこき紅乃綾おくに
それ文章し此又は
あらず

まさかおもふらかなり
彼君びする男の帰りてを
まざ細おどひまこなかつて
ゐは熱いとちるぞとあり
うちとみかうさきてある
へしとし

又いづこよりかのはしん
又他乃男れかよりゆり
きするさなし殿上人
あとのされおかわら思ひ
ゆるそのこを捨さうて
おの心とつやしかあるうち
きぬの　よくうちてつや
おるし 本 紅乃とそ
すこうわかさハ白きす
しの下さ紅
のすさや

なくずはこきさあやのつやなるなあらざる
くはなくぬきがうらこめてひきこさてず
ねとめるかうぞれひくくれなゐた事
やのあるすじ乃ちうなをこしとなく
きぬ乃売さらひられてもおうぎとみ
なかぐうなめりうぞめみてにめこみうち
てなそりてゆしのなるりじぶかぎさ
なしちられさてゝまた又いづこより来り
あんかさかうけ乃いうしうきわらち
さるうかさおぬれ乃ねきさおかるあ
きうれはうぞめれりぎきぬ白きこすし
おの心とつや座のなふうちきさぬの裳

はやくふるさのそさ
それよりゆ也

あさぢが乃露かちなき
りけるんとて
此男を思ひ乗り帰るさ
おもふ早くはの文
かんとせて篠薄
白きふべし
日ふ乃下草とて
新勅撰 楓麻の葉の
下草露をかつばかりで
ゆん歌は
万葉ニハ露あれは
いはけ
白き
てハさうつる
心よくや
秋の露を見て
露を
我か

そりくさめりおぎをぬぎすれてひん
乃すそみさえみれば忍ありのをし
いれられさるくしきもさどけなく見捨
あさぢが原乃露おちねかきさまよひんで
花乃ちりをもつらくしつ又乃下草中に
口すさひて我ゆくへゆくふかしのが
すかれはそうすれうぞをとさしあけて
見てたちきていぬかんへもおりし露を
おのれとおもひや忍りて見ればまろ
かしこ乃ふるかもしよれき
そのわさるあつぎひろごりあまがお子
ちのくふかざしろ乃さてかわそうやる

帝国図書館蔵書